

研究プロジェクト成果報告書（一般研究・特別研究）

研究課題 自分をつくり未来を拓く子どもが育つ学校
～子どもの「問い」が立ちあがる教育活動～

研究期間 令和2年度～令和3年度

研究代表者 上越教育大学附属小学校 校長 清水 雅之

研究組織

氏名	所属・職名	役割分担
清水 雅之	附属小学校・校長	研究代表者；研究の総括指導
松岡 博志	附属小学校・副校長	研究分担者；実践研究の総括
山之内知行	附属小学校・教頭 他 教諭16名	研究分担者；研究の立案、評価
土田 了輔	上越教育大学・教授 他 大学教員16名	研究協力者；理論的、専門的見地からの指導
関原るみ子	上越教育事務所指導主事	研究協力者；県行政の見地からの指導
松嶋 美華	上越市高田西小学校・教諭 他 公立小学校教諭20名	研究協力者；公立校からのデータ収集、活動 構想検討

1 研究開発課題

目指すべき21世紀を生き抜く能力をもつ子どもを「自分をつくり未来を拓く子ども」と置き、子どもの「問い」が立ちあがる4つの教育活動（創造活動、実践道徳、実践教科活動、集団活動）による教育課程開発に関する研究を行う。

2 研究の概要

私たちは変化の激しい時代の真っ只中にある。予期せぬ出来事が起こったり、多様な価値観が交錯したりする社会の中で、正しいと思っていたことやこれまで通用してきたことなどが、次々に疑われ始めている。このような社会をよりよく生きるためには、変化をとらえながら、対応することができる、しなやかな感性と、他者と共によりよさを追求し、アイデアや希望を生み出すことができる、前向きな知性が求められると考える。人工知能の躍進が、様々な問題解決を代替してくれる期待が高まる中で、人工知能と人間の対比から、人間らしさや強みがクローズアップされ続けていることは、人間が人間としてよりよく生きることを追求する社会、そして学校の到来を予見させる。

そこで私たちは、第11期教育課程開発研究を立ち上げ、体験から生まれる豊かな発想や柔軟な考えを基に、新しい時代を切り拓く子どもが育つ学校を具現したいと考えた。研究主題には、「自分をつくり未来を拓く子どもが育つ学校」を掲げ、第10期教育課程開発研究から続く「創造活動」、「実践教科活動」、「実践道徳」、「集団活動」の主に4つの教育活動からなる教育課程に基づきながら、子どもの姿から教育課程をつくり変え、人間が人間としてよりよく生きることを追求する、1つの未来像となる学校を目指したのである。

これまで、私たちは研究期にかかわらず、今を生きる子どもの姿を大切にしたい教育活動を展開してきた。その中で、子どもが対象とのかかわりを通して湧き上がらせる思いや願いを基に、物事の実現や解決に向かって、「どうすればよいのか」、「もっとよい方法はないか」などと自らに疑問を投げかけ、深く思考し、よりよい行為を生み出す子どもの姿を見てきた。改めて、研究主題を見つめたとき、子どもが自ら動き出したり、活動をつくり変えたりする姿には、子どもの「問い」がかかわっていることに着目したのである。

そこで、当校における「問い」を「活動をつくる原動力であり、対象とのかかわりに質的変容をもたらすもの」と定義した。この子どもの「問い」が立ちあがる教育活動をつくることこそが、研究主題である「自分をつくり未来を拓く子どもが育つ学校」を具現し、人間が人間としてよりよく生きることを追求する1つの未来像となる学校につながると考えたのである。

3 研究の目的と仮説等

(1) 研究仮説

子どもの「問い」が立ちあがる姿にある、教師のはたらきかけと、子どもの内面の変化をとらえていくことで、子どもの「問い」が立ちあがる教育活動の構想・展開の在り方を明らかにしていく。そのためには、以下の3つのことを明らかにする必要があると考え

る。

- 対象とのかかわりからつくられる子どもの潜在意識や論理をどのようにとらえていくのかを明らかにすること
- 子どもの「問い」が立ちあがる姿にあるはたらきかけは、子どもの潜在意識や論理にどのようなはたらきかけるものであり、それによって子どもの内面にどのような変化があるのかを明らかにすること
- さらなる子どもの思いや願いに結ばれていくはたらきかけを明らかにすること

(2) 教育課程を編成する4つの教育活動

「創造活動」	<ul style="list-style-type: none">・生活科と総合的な学習の時間を統合し、全学年において実施する。・対象と息長くかかわりながら、自然・人・文化をありのままにとらえる活動を設定する。・教育課程の中核に位置付け、他の3つの教育活動との関連を図る。
「実践教科活動」	<ul style="list-style-type: none">・実践国語科、実践社会科（3～6年）、実践算数科、実践理科（3～6年）、実践音楽科、実践図画工作科、実践体育科、実践家庭科（5～6年）、実践外国語科（4～6年）で構成する。・教科の知識や技能を自ら構成する実践的な活動づくりに取り組む。
「実践道徳」	<ul style="list-style-type: none">・創造活動等の実践を基に、自分や自分たちの在り方を深く見つめる時間を全学年において設定する。
「集団活動」	<ul style="list-style-type: none">・学級活動、プレイングチーム活動、集会活動、プロジェクト活動（5～6年）、サークル活動（4～6年）、学校行事で構成する。

4 研究成果の概要

(1) 子どもの「問い」が立ちあがる教育活動の構想・展開

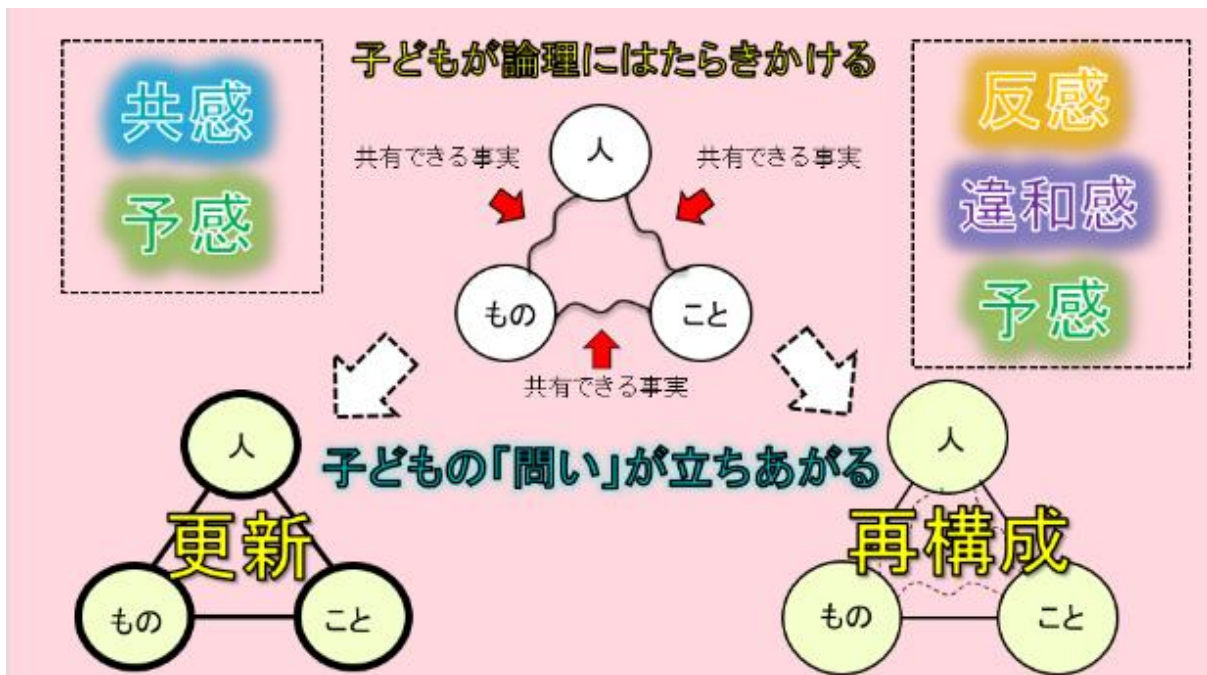
研究主題の具現を目指しながら子どもの姿を見つめる中で、子どもが自ら動き出し、対象とのかかわりをひろげていく姿に着眼した。そして、この子どもの姿は活動をつくる原動力に突き動かされており、子どもの対象とのかかわりに質的な変容がもたらされていることを見いだした。このような子どもの姿を、子どもの「問い」が立ちあがる姿としてとらえ直した。子どもの「問い」が立ちあがる姿が、四つの教育活動において繰り返し現れる教育課程の開発が、研究主題の具現になると考えた。

2020年研究では、子どもの「問い」が立ちあがる教育活動において、子どもが対象とのかかわりをひろげていく様相の特徴を探りました。子どもは、対象とかかわりながら、学年が上がる毎に「今」から過去や未来、「ここ」からどこか、「私」から会ったことのない誰かまで、見方・考え方をひろげていくことを見いだしました。このような対象とのかかわりのひろがりや、「【時間】【空間】【集団・社会】」のとらえをひろげる子ど

も」、(二年次におけるとらえ直しに基づき、以下「子どもがみている世界のひろがり」として整理した。子どもの「問い」が立ちあがる教育活動をつくるためには、「子どもがみている世界のひろがり」を勘案しながら、活動を構想することが重要であることが明らかになった。

また、各教育活動の理念、創造活動と実践道徳の学年の目標を整理した。四つの教育活動において子どもの「問い」が立ちあがる姿を具現するためには、それぞれの教育活動の理念や目標を勘案し、要件を位置付けて活動を構想することが重要であることが明らかになった。

2021年研究では、子どもの「問い」が立ちあがる教育活動の構想・展開の在り方を探った。子どもが潜在意識を言語化することを通して論理がつくられ、共有できる事実に対して共感、違和感、反感、予感のいずれか、または複数をはたらかせながら論理を更新、再構成しようとするときに、子どもの「問い」が立ちあがることを見いだした。さらに、子どもの「問い」が立ちあがる教育活動をよりよく構想・展開するためには、子どもの潜在意識や論理をとらえようとしながら、子どもが論理を更新、再構成し、対象とのかかわりをひろげ、対象のさらなる価値にふれていく姿を思い描いてはたらきかけていくことが重要であることが明らかになった。



(2) 子どもの姿の実際と成果

○子どもが対象とかかわりながらつくってきた論理の更新、または再構成する契機となるはたらきかけをすること

5年2組実践音楽科「ファンクション」において、渡辺教諭は「今まで子どもがつくってきた論理をさらに強く大きくはっきりさせ、論理を更新すること」を思い描いたと事後レポートに記している。その思い描きに基づき、子どもが仲間と表現を聴き合い、表現したいことと表現の工夫を結び付けることや、教師も子どもと共に表現の工夫を価値づけたり、速度や強弱

について具体的に提案したりすることを位置付けた。子どもは、対象であるリズムアンサンブルに魅力を感じ、ポプラオリンピックというテーマで表現したいことがあった。それを表現するリズムを多量につくり、つなげたり、重ねたりしていった。そして、仲間にも自グループの演奏を聴いてもらい、表現したい様子、心情と表現方法が結び付いたり、仲間の演奏を基に表現の工夫について自覚性を高めたりし、改めてよりよい表現をつくろうと試行錯誤しながらリズムアンサンブルに対する見方・考え方をひろげていった。そこに子どもの「問い」が立ちあがる姿が現れた。

対象であるリズムアンサンブルとかかわりながらつくっている子どもの論理にはたらきかけ、子どもが、つくっていた論理を基にしながらか、対象の見方・考え方をひろげていく。つまり、論理を更新する契機となる教師のはたらきかけによって、子どもの「問い」が立ちあがる姿が現れたのである。

2年1組外国語活動「うたって SONGS」において、子どもは、外国語の童謡とかかわりながら、その英語版と日本語版では意味の一致する言葉が用いられるという論理をつくっていた。それをとらえた丸山考平教諭は、子どもを、その論理が当てはまらないと感じ得る曲とその動画に出会わせた。子どもは、繰り返し歌ったり、聴き取った音をそのまま表現する「空耳」をしたり、歌詞に合わせた振り付けをしたりしながら、聴き取った音が指し示す言葉の意味を日本語版の歌詞に置き換えることやその曲の英語版と日本語版の歌詞を照らし合わせることをした。そうしながら、その曲の歌詞の英語版と日本語版には、意味が一致しない言葉が用いられていることをとらえ、仲間の発言から、それまでつくっていた論理を、童謡の英語版と日本語版では意味が異なる言葉が用いられることがあるという論理につくり変えていった。そこに子どもの「問い」が立ちあがる姿が現れた。

対象である外国語の童謡とかかわりながらつくっている子どもの論理にはたらきかけ、子どもが、つくっていた論理が崩れたことで、対象の見方・考え方がつくり変わっていく。つまり、論理を再構成する契機となる教師のはたらきかけによって、子どもの「問い」が立ちあがる姿が現れたのである。

このことから、子どもの「問い」が立ちあがる姿にある教師のはたらきかけは、子どもが対象とかかわりながらつくってきた論理の更新、または再構成する契機となるはたらきかけであることが明らかになったといえる。

○ 子どもの「問い」が立ちあがる姿にある教師のはたらきかけは、次のような子どもの姿が現れることを思い描いて、子どもやその環境に対して行うこと

- ① 共有できる事実に共感して、論理を更新する
- ② 共有できる事実への違和感を解消しようとして、論理を再構成する
- ③ 共有できる事実に反感を抱きながらも乗り越えようとして、論理を再構成する
- ④ 共有できる事実から予感したことを実現しようとして、論理を更新、再構成する

① 共有できる事実に共感して、論理を更新する

4年2組創造活動「ぐるっとバス紀行」において、平井教諭は「共通の体験を土台としながら共感をベースに言葉で伝え合いながら論理を確かにしていく子どもの姿を思い描いた」と事後レポートに記している。子どもは、教師から示された「路線バスは車のライバル」という言葉から、路線バスとかかわりながらとらえてきたその構造や料金、運転手の特長を話したり、路線バスと他の乗り物を比べたりしながら、路線バスの便利さを話していった。さらに、出会

ってきた利用者の視点から路線バスを見つめ、そのよさをより具体的にとらえ直したり、路線バスが抱える課題に目を向けたりしていった。そこに、子どもの「問い」が立ちあがる姿が現れた。

岡田指導教諭は、「路線バスの見方・考え方を、共感を土台にして緩やかにひろげ、今後も路線バスとかかわり続けていこうという気持ちを強くした本時の子どもの姿は、論理を更新していたととらえることができる」と事後レポートに記している。

つまり、子どもの「問い」が立ちあがる姿は、子どもが路線バスについてとらえてきた事実を共有して、自分が話すそのよさに仲間が共感したり、仲間が話すそのよさに共感したりすることができる場を設ける教師のはたらきかけが契機となり、子どもが論理を更新したことで現れたといえる。

② 共有できる事実への違和感を解消しようとして、論理を再構成する

2年2組実践道徳「野菜の生長について」において、倉井教諭は、創造活動「ごちそう野菜」で子どもが野菜とかかわりながら、野菜は自分の世話によって生長するという論理をつくっている一方で、野菜自らの生長に着目していることをとらえた。子どもは、「収穫できたのは、あなたが野菜を育てたからですか。野菜が自分で生長したからですか」という教師のはたらきかけに促され、野菜にしてきた世話と野菜の生長の関係を見つめた。そして、自分が何もしていない間に野菜が生長した事実への違和感をもち、自分が野菜にしてきた世話と野菜自らの生長を併せてとらえ直し、野菜の世話とはその生長を引き出すことであるとか、野菜の生長は野菜と自分の協力によるものであるという論理につくり変えていった。そこに、子どもの「問い」が立ちあがる姿が現れた。

つまり、子どもの「問い」が立ちあがる姿は、子どもが野菜とかかわりながらつくってきた論理に基づくと、違和感をもち得る事実に出合う場を設け、それへの違和感をもちつことを促す言葉を取り上げて共有し、その違和感を解消しようとしている子どもの発言を促す教師のはたらきかけが契機となり、子どもが野菜の生長についての論理を再構成したことで現れたといえる。

③ 共有できる事実に反感を抱きながらも乗り越えようとして、論理を再構成する

4年1組実践道徳「クロサンショウウオは幸せなのか」において、吉越教諭は、創造活動「郷遊記」で子どもが月影地区で捕まえたクロサンショウウオとかかわりながら、その成長が自分の喜びであるという論理をつくっている一方で、その死からクロサンショウウオの幸せに目を向けていることをとらえた。吉越教諭は、クロサンショウウオの死についての「『しょうがない』という発言は、子どもの中につくられた論理の矛盾や対立、迷いなどが生じるはたらきかけになるのではないかと考え、本時を構想した」と事後レポートに記している。

子どもは、クロサンショウウオの死について思ったことを話しながら、教師が取り上げた「しょうがない」という言葉やその理由に憤ったり、逆に「しょうがない」と話す仲間の考えに憤ったりしながら、月影地区で生まれ育つクロサンショウウオとそこで捕まえられて4年1組教室で育つクロサンショウウオの幸せについて、生き物の生命や家族の存在、人生における幸せを見つめ、話していった。そこに、子どもの「問い」が立ちあがる姿が現れた。

大岩主幹教諭は「道徳的価値について深く思考するには、同質の考えだけではなく、自分とは異なる視点にある仲間の考えにふれることが大切になってくるのではないかと本時の活動から再確認している。自分とは異なる視点だからこそ、『えっ、そうかな』『でもさ』と立ち止まって思考したり、考え直したりする。そのように子どもが揺さぶられながら思考していく過

程において、子どもの『問い』が立ちあがり、道徳的な価値観をつくり深めていく姿があると思われる」と事後レポートに記している。

つまり、子どもの「問い」が立ちあがる姿は、クロサンショウウオの死についての考えを仲間と共有し、反感を抱きながらも乗り越えようとする子どもの発言を促す教師のはたらきかけが契機となり、子どもが論理を再構成したことで現れたといえる。

④ 共有できる事実から予感したことを実現しようとして、論理を更新、再構成する

1年1組創造活動「さんさんフィールド」において、子どもは、3頭のアルパカと共に生活をつくりながら、3頭のアルパカの性格や特徴、関係性についての潜在意識や論理をつくり、それらを作成シートやスケッチブックに「アルパカさんのひみつ」と表現していた。子どもは、仲間が記していた「アルパカさんのひみつ」に出会うとともに、とらえてきた「あらし、ダン、しんのすけのひみつ」を話すように教師から促され、共に生活をつくってきた中でアルパカの変化、アルパカのある行為から推測する心情やアルパカ相互の関係について話したり、仲間がとらえた「ひみつ」を聞いたりしていった。加えて、3頭のアルパカの性格や特徴、関係性について、自分で確かめたいことやさらに見つめていきたいことが生まれ、3頭のアルパカとかわりながら、それらのことを実現しようとしていった。そこに、子どもの「問い」が立ちあがる姿が現れた。

渡辺教諭は「アルパカに触れた時の手触り、におい、雰囲気等を直感的に感じた心の動きや、アルパカにはたらきかけたりはたらき返されたりする双方向で生じた時の期待や楽しさ、仲間のアルパカに対するとらえのよさやおもしろさなど、子どもは心を動かしながら、具体性のあるやりたいことを新たな思いや願いとしてもった」と事後レポートに記している。

つまり、子どもの「問い」が立ちあがる姿には、共に生活をつくっている3頭のアルパカの性格や特徴、関係性を共有しながら「確かにそうかもしれない」や「他にもありそうだ」と予感したことを、自分で確かめようとしていたり、新たなことをみたりしたいと、思いがひろがる教師のはたらきかけが契機となり、3頭のアルパカについての論理を更新、再構成していくことで現れたといえる。

5 研究成果の発表状況・研究成果の還元

(1) 研究書籍「子どもの『問い』が立ちあがる」の全国出版

第11期教育課程開発研究についての理論や実践を掲載した研究書籍「子どもの『問い』が立ちあがる」を、令和3年3月31日に学事出版より全国出版した。

(2) 研究パンフレット

研究紀要に代わるものとして、研究パンフレットを作成し、事前に研究会の参加者に配付した。研究リーフレットにしたことで、限られた誌面のため、研究内容が焦点化され、附属小の研究が分かりやすくなったと好評であった。研究リーフレットを介して、研究内容についての問い合わせ依頼が来るなど、附属小の研究に関心を持ってもらうきっかけとなっている。

(3) 学校視察、活動公開の受け入れ

6月に新潟県教育委員会が実施する「小学校初任者研修」の会場校として、初任者研修受講者（上越市15人、糸魚川市5人、計21人）に対して、子どもの「問い」が立ちあがる教育活動の構想・展開について、全クラスの授業を公開した。また、名古屋市教育セ

ンターをはじめ、千葉県、大阪府など、全国から学校視察を受け入れ、当校の教育課程について、概要説明や質疑、学校見学や活動公開などを実施し、研究プロジェクトの成果を発信してきた。

(4) 2021年研究会、午後研究会

2021年11月19日(金)に2021年研究会を開催した。6月には研究協力者会兼午後研究会を開催し、本学教授陣の研究協力者や市内外の公立校研究協力者、一般参観者から、研究説明や授業参観を元にした研究協議会を行い、90名の参加者を迎えた。

2021年研究会では、対面型とオンライン型のハイブリッド方式での研究成果発表とした。10月から11月にかけて、13の活動公開動画撮影に併せて活動公開を行い、計91名の参観者を迎えた。11月19日には、コロナ禍での新しい研究発信の在り方を探りながら、オンライン研究会を開催した。オンラインによる協議会および講演会(慶應義塾大学 鹿毛雅治教授)を開催し、417名の参加者に附属小学校の研究成果について発信することができた。

また、当日ライブ配信した「講演会」について、当校HPに掲載した。300人以上の視聴があり、さらに当校の研究について発信している。